山梨アートプロジェクト 2021（山梨県立美術館）

道祖神リプレゼンテーションの 8 つの成果

深澤孝史企画《ドキュメント集》

2022 年 1 月

編著・発行：本阿弥清＋道祖神芸術調査グループ

「丸石道祖神」（山梨市七日市場中組）のオコヤ
撮影：雨宮千鶴　※表紙の写真撮影：深澤孝史

目　　次

■　本編 3

1　はじめに（深澤孝史） 3

2　プロジェクト企画趣旨 3

3　「道祖神芸術調査グループ」調査員募集と特別調査員の招聘 3

4　「道祖神リプレゼンテーション」のプロセスと 8 つの成果 5

5　「道祖神(丸石神)」フィールドワークの開催 6

(1) 2021 年 10 月 30 日（土） 6
(2) 2021 年 10 月 31 日（日） 9

6　「北池」にアート作品『いしのまつりば』(仮設)の展示 11

(1) 「幕絵」の展示(岡本太郎彫刻ヒロバ) 11
(2) 「丸石」や「石神未満」を展示(北池) 12

7　「道祖神しんぶん」の制作と発行 14

(1) 「道祖神しんぶん」第 1～2 号 15
(2) 「道祖神しんぶん」第 3～4 号 16
(3) 石(丸石など)関係の図書 17

8　「ワークショップ」と「パフォーマンス」の開催 18

(1) 「ワークショップ」の開催 19
(2) 「パフォーマンス」の開催 20

9　「道祖神芸術調査グループ ドキュメント」の映像上映と「中沢新一講演会」の開催 21

10　「北池」再生計画の提案 22

(1) 人工素材を極力使わない工法の導入 22
(2) 金生遺跡など伝統・文化を投影させた北池 23
(3) モダニズム建築を生かした修景デザイン 24

11　おわりに（深澤孝史、本阿弥清） 26

■　参考資料 28

1　山梨県立美術館と「山梨アートプロジェクト 2021」 28

2　「石子順造と丸石神」展(多摩美術大学芸術人類学研究所・2010 年) 29

■ 本編

1 はじめに（深澤孝史）

今回、山梨県立美術館主催の「山梨アートプロジェクト 2021」という企画で《道祖神リプレゼンテーション》というアートプロジェクトを実施した。

プロジェクトでは、「道祖神芸術調査グループ」という名称で広くメンバーを募集し、道祖神や丸石神と芸術や表現との関係を、美術や民俗、人類学、歴史学などさまざまな観点で領域横断しながらプロジェクトを進め、それぞれメンバーの研究を深め、芸術表現を生み出すあるいは見出すプロセスを共有した。短い期間のプロジェクトで、まだやり残しているものの方が多いのが事実ではあるが、いくつかの成果と提案も生まれた。

今回、この記録集でそれらについて発表させていただく。

※以下、敬称略

2 プロジェクト企画趣旨

本プロジェクトは、企画当初、山梨で現在「道祖神」と呼ばれている信仰が変容しながらも今も息づいていることに着目して、道祖神の文化を別の形で再演・再現する場を作り、発表するプロジェクトとして提案した。

そして、「道祖神」からは、構造、神話、イメージ、上演などの観点から、参加者と共に学ぶ場を作り、そこから表現を創出していくことを目指した。

企画段階では、同時に、丸石神や道祖神にまつわる文化・芸術史的な側面を掘り下げ、現在の活動と結びつけたいという意図もあった。

本プロジェクトにおいて作家である深澤孝史は、運営、ディレクション、ファシリテーション、制作の役割を担った。

また、「道祖神祭り」が、さまざまな民俗的な風習や芸能表現を生み出していること以外にも、1970 年以降には、中沢厚の民俗史的な道祖神の研究や、その研究に石子順造（美術評論家）が触発されたことで、「丸石道祖神」と「現代美術」との接点が導き出され、抽象的造形表現の観点からも丸石道祖神を鑑賞する視点が生まれ、美術関係者にも影響を与えたといえる。

それからさらに数十年が経ち、現在、一般市民が、地域の道祖神とそれぞれの個々人とを結びつけて、新たな関係を構築する事例も多く生まれている。

以上のように、道祖神自体が、領域を拡張しながら、さらに横断的なものとして存在し続けているのである。

3 「道祖神芸術調査グループ」調査員募集と特別調査員の招聘

今回は、そうした道祖神と文化の関係を横断的に調査するために、「道祖神芸術調査グループ」を立ち上げることにした。

調査員は、山梨県立美術館の広報をとおして 9 月から開始して 9 名の応募があった。

また、プロジェクト期間中には、毎週オンラインミーティングを開催した。

さらにより濃密なリサーチを展開するために、特別調査員という形でゲストリサーチャーを招聘した。静岡在住の都市環境デザイナーであり美術評論家の本阿弥清、批評家でキュレーターの四方幸子、そして、深澤が参加した石巻の「Reborn-Art Festival」（2019 年）で出会った思想家で人類学者の中沢新一と秘書の野沢なつみの 4 名である。

1) 調査員メンバー（9 人）

■金丸貴臣

石にまつわる信仰の愛好家。文学を専門とする教育者でもある。

■小池準一
歴史学が専門で、現在は道祖神の台座や石祠なども含む石造物に穴を穿つ「盃状穴」(おそらく何かの信仰の名残こり)の研究を行っている。

■近藤朋希
都内にあるファッション系大学の学生。商業的だけでなく、人類学的視点で作品制作に反映したいという熱意があり、今回参加。

■鈴木つな
甲府のお寺に住むダンサー。道祖神祭りを通して、祭祀と舞踊のつながりについて知り、自身の表現を探求するために参加。

■芹沢 昇
釈迦堂遺跡博物館の元学芸員。現在、市民講座の講師をしながら道祖神やミシャグチの調査を行っている。

■辻 佑介
甲斐市出身、千葉県在住。当初は山梨における表現の可能性を探る目的で参加したが、調査を進める中で実父が丸石道祖神の氏子であることを知る。

■戸田圭亮
本プロジェクト中にインド料理屋を開業。数年前に東京から山梨に移り住み、丸石道祖神と出合い関心を持つ。お店がある場所に丸石を屋敷神のように祀っている。

■広瀬和弘
南アルプス市職員。長年南アルプス山系の自然保護業務に従事。専門は猛禽類とライチョウ。丸石が置かれた街並みの移り変わりに気づき現在撮影を続けている。

■渡辺俊夫
首都圏にある大学の美学・芸術学専攻の大学院生。人類学と芸術との横断的視点を持って自身の研究とともに、展覧会キュレーターも並行して行っている。

2) 特別調査員メンバー(4 人)

■中沢新一
山梨県生まれ。思想家・インド・ネパールで仏教を学び、帰国後、人類の思想全域を視野にいれた研究分野(精神の考古学)を構想・開拓する。民俗学者の父、中沢厚の影響もあって、幼い頃から丸石道祖神の世界に親しんでいる。『チベットのモーツァルト』『森のバロック』『精霊の王』『カイエ・ソバージュ』シリーズ、『アースダイバー』シリーズ、『レンマ学』など著書多数。

■野沢なつみ
中沢新一の秘書。中沢新一とともに山梨県の丸石神のフィールドワークを長年続けてきた。

■四方幸子
「情報フロー」というアプローチから諸領域を横断するキュレーター/批評家。学生時代には山梨県の民俗フィールドワークも。現在、諏訪・八ケ岳地域の自然と精神性をリサーチするアートの場「対話と創造の森」に参画。美術評論家連盟会長。多摩美術大学・東京造形大学客員教授、武蔵野美術大学・情報科学芸術大学院大学(IAMAS)・國學院大学大学院非常勤講師。

■本阿弥 清
静岡市在住。本業は建築系の都市環境デザイナー。美術評論の世界では、〈石子順造〉〈もの派〉〈グループ幻触〉の研究者としても知られている。著書に『もの派の起源』(水声社 2016 年)がある。「わたくし美術館」運動の実践家で、現代美術系「虹の美術館」の元館長。現在、NPO 法人環境芸術ネットワーク代表。美術評論家連盟会員。

3) 企画メンバー(2 人)

■**深澤孝史**

美術家。山梨県出身、札幌在住。国内外さまざまな場所でアートプロジェクトを実施。主なプロジェクトとして、《New Town My Home Theater/信仰住宅地》(のせでんアートライン、2019)、《海をつなげる》(Reborn-Art Festival、2019)、《Football field for buffalo》(THAILAND BIENNALE、2018)、《かみまちハーモニーランド》(TURNLAND、2018)、《神話の続き》(奥能登国際芸術祭、2017)、《常陸佐竹市》(茨城県北芸術祭、2016)、《とくいの銀行》(取手アートプロジェクトほか、2011-)など。

■**石山 律**

プログラム・コーディネーター。18 歳まで山梨育ち。現在は秋田暮らし 4 年目。勤務先やその他で展覧会コーディネートやイベント企画、プロジェクト制作などをおこなう。主な展覧会コーディネートに、磯崎未菜『singing forever 高砂』(2019 年、秋田公立美術大学ギャラリーBIYONG POINT)、石毛健太『アイオーン』(2020 年、同)。

4) Zoomミーティング参加者

■**山梨県立美術館**(**雨宮千鶴**《担当者》、**井澤英理子・太田智子・成島由季子・下東佳那**《関係者》)

■**白砂勝敏**(美術家、演奏家)

4 「道祖神リプレゼンテーション」のプロセスと 8 つの成果

当初、深澤孝史は、候補地として北池をプロジェクトサイトに選んだ理由として、屋外であり、空間と時間を感じるという印象で選んでいたが、実は「山梨アートプロジェクト 2021」における山梨県立美術館側の狙いの一つとして、「北池」の再生という課題があった。

企画段階では、プロジェクトのアウトプットやリサーチの内容を、努めて北池の再生の意図と道祖神を結びつけようとは考えていなかったのだが、北池視察から道祖神場や金生遺跡のフィールドワークを経て、自ずと北池自体を道祖神場や山梨の扇状地の縮図として捉え直して行くという意識の変容が調査員の間で生まれた。そして、フィールドワークで出合った野生の丸石たちを北池に祀るなどを行い、「いしのまつりば」という公園としての再生を試みた。

また、会期中には、調査員らによって執筆された「道祖神しんぶん」を 4 号まで発行、さらに親子対象のワークショップ「どうそじんをつくろう」を開催した。

展示最終日には、クロージングイベントとして、深澤孝史らが撮りためた調査員らの活動を撮影した「映像記録」の上映、特別調査員として参加してくれた「中沢新一講演会」(Zoom によるオンラインレクチャー)、ダンサーの鈴木つな(調査員の一人)らによる「北池」を舞台に見立てたパフォーマンス「いしはおどる いしとまう」とワークショップも行われた。

そして、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以来、水を溜める機能がなくなった「北池」については、特別調査員の本阿弥清が中心になって「北池・修景再生プラン」を作成し提案した。

① 「道祖神芸術調査グループ」の結成
② 丸石道祖神調査フィールドワークを実施
③ 北池を仮設公園「いしのまつりば」へと変容
④ 「道祖神しんぶん」の発行
⑤ ワークショップとパフォーマンスの実施
⑥ 映像ドキュメントの上映
⑦ 中沢新一オンラインレクチャーの開催
⑧ 「北池・修景再生プラン」を美術館に提案

5 「道祖神(丸石神)」フィールドワークの開催

私たちは、先ず山梨県内の「道祖神」の状況を知るために、調査員及び特別調査員による「道祖神芸術調査グループ」を作り、美術館の担当者も参加して合同でのフィールドワーク(2 日連続企画)を実施して、調査員らの共通認識を図ることにした。

(1) 2021 年 10 月 30 日(土)

■参加者

(調査員) 金丸貴臣、小池準一、近藤朋希、鈴木つな、辻佑介、戸田圭亮、渡辺俊夫

(特別調査員) 四方幸子、野沢なつみ、本阿弥清

(企画者) 深澤孝史、石山律 **(山梨県立美術館)** 雨宮千鶴、成島由季子

■スケジュール

9:30 山梨県立美術館出発

10:15～11:15 山梨市日下部地域の調査
(コメント:「道祖神場」のフィールド調査を行ったが、多くの場所で「丸石道祖神」が祀られていた)

11:30～12:30 山梨市八幡地域の調査
(コメント:地域内に点在する「道祖神場」の調査を行った。この地域においても「丸石道祖神」がいたるところに祀られていた)

12:45 山梨市上神内川道祖神の調査
(コメント:地域内に点在する「道祖神場」の調査を行った)

13:00～13:10 笛吹市一宮町坪井地域の調査
(コメント:地域内に点在する「道祖神場」の調査を行った。この地域でも「丸石道祖神」がいたるところに祀られていた)

13:20～13:45 笛吹市一宮町坪井の牛飼神社の調査
(コメント:この地域でも「丸石道祖神」が祀られていた)

14:00～16:00 山梨県立博物館での聞き取り調査
(コメント:丸尾依子学芸員から、山梨県内の道祖神や道祖神祭りについての説明を聞いた後に、調査員との意見交換会を行なった)

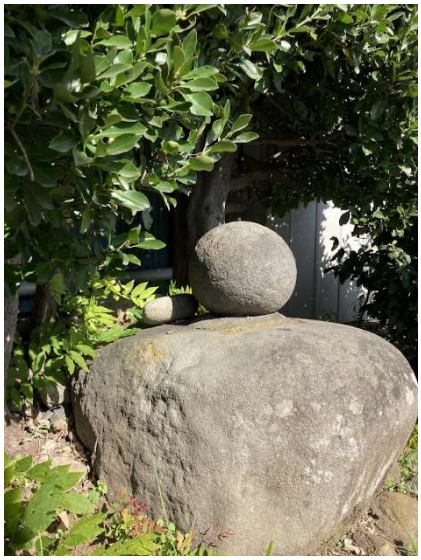
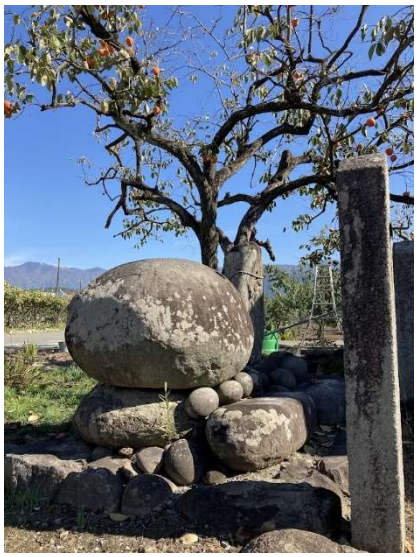
16:30 山梨県立美術館で解散

調査員による「北池」の現地調査 撮影:石山律

「掘り出された石」山梨市七日市場の福祉施設基礎工事現場 ※元は笛吹川の場所?

調査で見つけた「丸石道祖神」 撮影：四方幸子

調査で見つけた「石神未満」
撮影：雨宮千鶴

調査で見つけた「丸石道祖神」 撮影：野沢なつみ

工事現場「掘り出された石」 撮影：野沢なつみ

記念に持ち帰り「北池」に飾る
予定の丸石　撮影：野沢なつみ

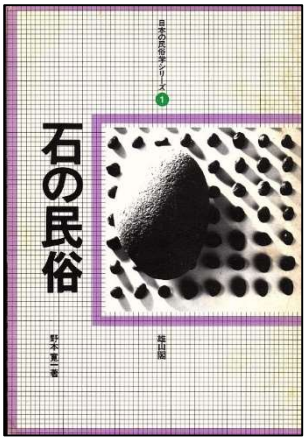
【やまなしの道祖神祭り】 講師：山梨県立博物館学芸員　丸尾依子

丸尾学芸員には、山梨と全国の道祖神との違い、他信仰との習合、分布、起源の諸説、芸能、道祖神祭りなどを、総合的、網羅的に解説いただいた。

特に、石が祀られた貴重な記録とされる《信貴山縁起絵巻＿尼君の巻》のことや、静岡県相良町(現牧之原市)の大興寺「子生まれ石」などの話をされた。

「子生まれ石」の話は、丸石の伝承例として、野本寛一『石の民俗』(雄山閣 1975 年)の中や、中沢新一の講演(12 月 12 日)でも詳しく語られている。

「道祖神」の説明をする丸尾依子学芸員　撮影：石山律



石の民俗（野本寛一）
雄山閣 1980 年

＜参考資料＞

①《信貴山縁起絵巻＿尼君の巻》のなかの丸石

近年、「丸石」信仰の研究では、平安時代に描かれた《信貴山縁起絵巻》のなかに、丸石が祀られている例として、この絵図を紹介することが多くなっている。

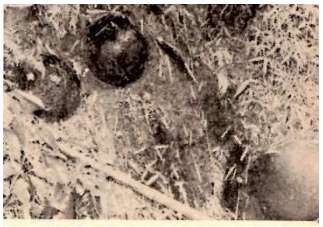
《信貴山縁起絵巻》には、「丸石」が祀られている様子が描かれているが、甲府盆地の丸石信仰と同じなのかは、現時点でははっきりとはわかっていない。

②「子生まれ石」の伝承

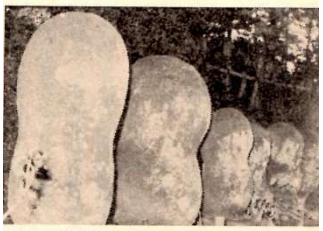
野本寛一は、大興寺の伝承がある静岡県相良町出身であり、野本寛一の著書『石の民俗』から「子生まれ石」の由来について以下に引用する。

「相良町西萩間に曹洞宗の大興寺がある。その裏山を隔てたところに、萩間川の一支流、御相談川があり、上流の崖から径 25 センチ、長さ 40 センチ前後の繭型の自然石が生まれ出る。長年月風雨にさらされて生まれ出る石を、人びとは「子生まれ石」と呼ぶ。この石が崖から生まれ落ちると大興寺の住職が必ず死ぬという伝承があり…中略…この伝承を裏づけるかのように、大興寺の歴代の住職の墓石にはこの石が用いられている。繭型の自然石が並ぶ墓地には異様な雰囲気が漂っている」

《信貴山縁起（絵巻）模本＿尼君の巻》の部分
東京国立博物館蔵



ⓐ崖から頭を出している子生まれ石



ⓑ子生まれ石を墓石としたもの

野本寛一著『石の民俗』より
「子生まれ石」

(2) 2021 年 10 月 31 日(日)

■参加者

(調査員) 金丸貴臣、小池準一、鈴木つな、辻佑介、広瀬和弘、戸田圭亮、渡辺俊夫

(特別調査員) 四方幸子、野沢なつみ、本阿弥清

(企画者) 深澤孝史、石山律　**(山梨県立美術館)** 雨宮千鶴

■スケジュール

9:30　山梨県立美術館出発

9:45　松尾神社(甲斐市)の調査
(コメント:松尾神社周辺の「道祖神場」のフィールド調査を行ったが、集落沿いには多くの「丸石道祖神」が祀られていた。また、敷島書房(店主一條宣好)にも立ち寄った)

11:00　高野八幡神社(北杜市)の調査
(コメント:高野八幡神社のフィールド調査を行った。神社の敷地内には廻り舞台があり、神事や神楽が舞われた場所とされる)

11:30　白旗神社(大泉村)の調査
(コメント:自然石を組み合わせて建立した多重塔があった。巨石のまわりを力強く踏むと太鼓をたたく音がするという)

12:00～13:00　金生遺跡(北杜市)の調査
(コメント:「配石遺構」があり、その象徴が「石棒」や「丸石」だとされている。また、この集落では祖霊を敬う祭礼が行われたとされる。集落跡は、南西の方向に甲斐駒ヶ岳の雄姿を望む場所にある)

13:00～14:00　北杜市考古資料館の調査
(コメント:館内を見学しながら長谷川誠学芸員の説明を聞く。3000年近く前に「丸石」や「石棒」が祈りの対象になっていたことを知ることができた)

15:00～　山梨県立美術館にて調査員との意見交換会
(コメント:美術館学芸員と調査員らが、2 日間にわたるフィールド調査で分かったことや「道祖神祭り」の意味などについても話し合った。また、美術館「北池」で行うアートプロジェクトについても意見交換を行った)

17:00　山梨県立美術館で解散

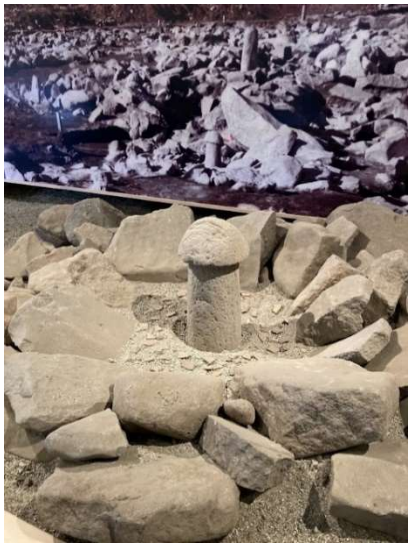
調査で見つけた「丸石道祖神」
撮影:野沢なつみ

一條宣好(敷島書房)から話を聞く
撮影:広瀬和弘

丸石を日常で使う「石神未満」の姿(物干し台・柵・コンポスト)
撮影:野沢なつみ

「白旗神社」の多層塔
撮影:広瀬和弘

「金生遺跡」で長谷川学芸員の話を聞く調査員
撮影:広瀬和弘



「北杜市考古学資料館」 のレプリカ
撮影:野沢なつみ

「金生遺跡」の配石遺構
撮影:野沢なつみ

長谷川学芸員「金生遺跡」の説明
撮影:本阿弥清

6 「北池」にアート作品『いしのまつりば』(仮設)の展示

【まつりばの案内】

「道祖神の公園」とは、山梨特有の道祖神の信仰が生まれた背景や道祖神から生まれた表現や文化に巻き込まれることを目的とした道祖神のための公園である。

道祖神の公園には、「道祖神場」「盃状穴場」「石神未満」という 3 つの遊び場がある。

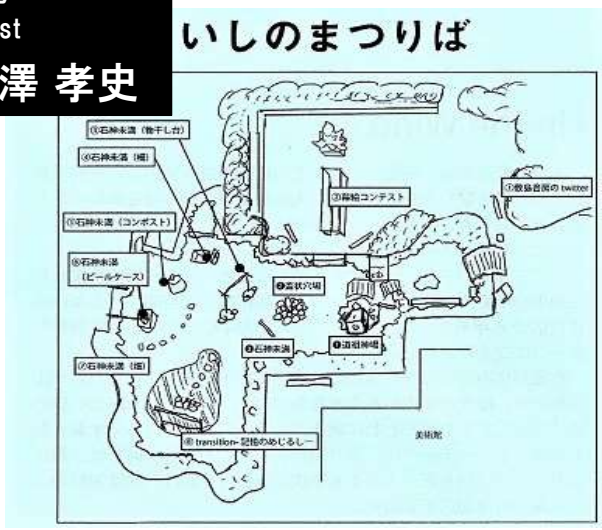
【展示案内】　展示場所:美術館『北池』／展示期間:11 月 16 日(火)～12 月 12 日(日)

「いしのまつりば」では、道祖神の創造性をテーマにした展示をおこなった。

また、道祖神や石の神が生まれる起源の仮説としての「石神未満」や、ハレとケや集落のコミュニティとの繋がりだけでなく、新たな丸石神や道祖神と人との関係や道祖神が生み出す多数な表現の連鎖をねらってみた。

展示エリア1
北池
Artist
深澤 孝史

■道祖神場…外からいい感じの石を持ってきて祀ることができる場所
■盃状穴場…石を叩いて石にいい感じに穴をあけることができる場所
■石神未満…石をいい感じに動かして遊ぶことができる場所



幕絵コンテスト入選作と岡本太郎彫刻　撮影:深澤孝史

(1)「幕絵」の展示(岡本太郎彫刻ヒロバ)

【幕絵コンテスト】

江戸時代から明治初頭にかけて甲府のまちなかで行われていた道祖神祭りでは、10 メートル以上の長さにもなる幕絵を歌川広重など有名絵師に依頼し、厄除けの意味もこめて店の軒先に飾っていた。

甲府商工会議所では、2007 年よりその風習にあやかり、「幕絵コンテスト」を開催して作品を公募し、現代の甲府のまちなかに幕絵飾りを復活させている。

■出品作品(4 点)

《種をまく人》 NPO 法人虹の谷

《共存 in やまなし》 北杜市立泉中学校美術部　※他 2 作品タイトル作者不明

幕絵コンテスト入選作品のトンネル部分
撮影:深澤孝史

幕絵コンテスト入選作品のトンネル部分西側
撮影:深澤孝史

(2)「丸石」や「石神未満」を展示(北池)

「いしのまつりば」の入口　撮影:深澤孝史

【敷島書房の twitter…一條宣好】

甲斐市の一條宣好は、他界した父が 1970 年に開業した書店「敷島書店」を 2008 年に受け継ぎ営んでいる。収入の大部分が父が残した配達販路である。

ライフワークとして民俗学を研究している一條は、配達の最中眺める景色を、民俗的歴史的な意味合いも含み再発見し、もともと営業目的で始めた twitter で風景写真にコメントを添えて投稿するようになった。

それまで一條にとって精神的な負担だった配達業務の意味合いも変化し、投稿を見て一條に会いに訪れるお客さんも増えてきた。

自身の配達業務と現代的な意味での道の神としての道祖神が融合し、新たな道祖神と個の関係が敷島書房には築かれている。

【transition 記憶のめじるし…広瀬和弘】

広瀬和弘の写真連作《記憶のめじるし》の一枚。

広瀬は、南アルプス市の職員として、南アルプスユネスコエコパークの推進をけん引してきた。

2021 年になって、故郷の山梨市の笛吹川で丸石を見つけたことがきっかけで、移設されることもあるが、変わらない丸石道祖神と、移ろいゆく故郷の景色の対比を撮影するようになった。現在、通信制の大学にも通い、卒業制作として本作品は準備されている。

一條宣好の丸石道祖神の写真　撮影:深澤孝史

広瀬和弘の丸石道祖神の写真
撮影:深澤孝史

【石神未満】

山梨の丸石神が、「いい感じ」の石を神として祀ることだとすると、いい感じでない普通の石でもいい感じに活用されているように、「石神未満」といえないだろうか。

山梨には多様で魅力的な石神未満が溢れており、そのことが石を祀る文化の土台を形成していると考える。今回、フィールドワークで見つけた石神未満をいくつか再現展示している。北池の「いしのまつりば」では、QR コードを読むと元の写真を見ることができる。

■石神未満（物干し台）　■石神未満（柵）　■石神未満（コンポスト）
■石神未満（ビールケース）　■石神未満（畑）

石神未満(コンポスト他)　撮影：深澤孝史

石神未満(柵)　撮影：深澤孝史

【道祖神場と盃状穴場】

山梨の笛吹川流域には、「道祖神場」が数多く分布しており、特に、他県と異なるのは「丸石」を飾る例の多さである。今回のフィールドワークで見つけた「丸石」を、北池の「道祖神の公園」に持ち込んでみた。

「盃状穴場」とは、道祖神をはじめとする石造物や磐座などに穿たれた、すり鉢状の穴のことであり、なぜ穿たれたのかの理由の多くは分かっていないと小池準一はいう。

北池の彫刻《かくし灯籠》と丸石　撮影：深澤孝史

持ち込まれた丸石　撮影：深澤孝史

北池につくられた「盃状穴場」　撮影：深澤孝史

石神未満(物干し台)　撮影：深澤孝史

7 「道祖神しんぶん」の制作と発行

今回、広報紙は 4 回発行した。国内のアートプロジェクトの広報紙 2 例も紹介する。

アートキャンプ白州の例 （1993～94 年の新聞）

「アートキャンプ白州」は、山梨県白州町で 1988～1998 年の夏に開催された、田中泯らが、舞踏のパフォーマンス公演を中心に、美術・演劇・音楽・映像・建築・農業などの多岐にわたる表現活動を行った日本のアートイベントの草分け的存在だった。

アートキャンプ白州「白州日々新聞」1993 年

アートキャンプ白州「白州日々新聞」1994 年

越後妻有アートトリエンナーレの例 （2012 年の新聞）

北川フラム(美術ディレクター)らによって新潟県十日町市などで開催された越後妻有アートトリエンナーレ(大地の芸術祭)は、2000 年からスタートして現在も 3 年ごとに新潟県十日町市、津南町で行われ、2018 年には第 7 回が 7 月から 9 月までの 51 日間が開催され、50 万人以上の来場者があったとされている。

新潟日報「越後妻有アートトリエンナーレ特集号」2012 年

(1)「道祖神しんぶん」第 1～2 号

「道祖神しんぶん」第 1 号　表面(右)と裏面(左)

道祖神しんぶん　第一号

「道祖神芸術調査グループ」始動　深澤孝史

●○わたしと道祖神●○

「記憶のすみか」広瀬和弘

「丸石問答：その１」四方幸子（特別調査員）

●○わたしと道祖神●○

「丸石神と石子順造」本阿弥清（特別調査員）

きっかんじ　芹沢昇

書評

中沢新一『芸術人類学』（みすず書房、2006 年）

渡辺俊夫

「道祖神しんぶん」第 2 号　表面(右)と裏面(左)

道祖神しんぶん　第二号

どんどん焼き　芹沢昇

●○わたしと道祖神●○

「『穴』の魅力」小池準一

人はなぜ踊るのだ　鈴木つな

道祖神小説　石の満月（前）　黒田康之

(2)「道祖神しんぶん」第 3～4 号

「道祖神しんぶん」第 3 号　表面(右)と裏面(左)

●○わたしと道祖神●○

「道祖神シューズ」近藤朋希

「父と石と私」辻佑介

道祖神小説　石の満月（中）　黒田康之

道祖神しんぶん　第三号

2021年12月7日
発行：道祖神芸術調査グループ

お問アドレス：プロジェクト2021
深澤孝史
「道祖神トリビュレーション」

ご質問・ご要望は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

●○わたしと道祖神○●

「丸石問答：その２」四方幸子（特別調査員）

「丸石のある日々」戸田圭亮

○緊急告知○
12月12日（日）
クロージングイベント

①芸能発表「いしはおどる　いしとまう」（申込不要）
丸石神や道祖神の民間信仰を始めたダンサー・鈴木つなによる踊りの上演を行います。踊りでは、石を用いて祭りを場面もあり。来場者も一緒に参加できます。希望者は、事前ワークショップに参加ください。
日時：12月12日（日）13:00~14:00
13:00~13:30　事前ワークショップ（石と遊んだり、石のようになってみたり、石を踊ごる30分）
13:30~14:00　芸能発表
場所：「いしのまつり」（山梨県立美術館・広場）
出演：鈴木つな／笛奏：自由演奏、小清水ミキコ／
衣装：石藤泰豪
※雨雨決行。雨天中止（中止の場合は当日10:00までに山梨県立美術館Twitterでお知らせします。）

②映像上映「道祖神芸術調査グループ ドキュメント」（要申込）
道祖神芸術調査グループのフィールドワークやシンポジウム、ミーティングなどのプロセスをまとめたドキュメント映像を上映します。
日時：12月12日（日）14:15~14:45
場所：山梨県立美術館・工房＆Zoom オンライン
定員：工房 30 名、Zoom100 名

③オンラインレクチャー「丸石神の人類学」（要申込）
日時：12月12日（日）15:00-16:30
場所：山梨県立美術館・工房＆Zoom オンライン
講師：中沢新一（思想家・人類学者）（Zoom オンラインでの参加）
定員：工房 30 名、Zoom100 名

【申し込み方法】
①芸能発表「申し込み不要、直接現地にお越しください。
②映像上映、③オンラインレクチャー：dousojin2021@gmail.com 宛に「お名前、参加方法（工房かZoom オンライン）、参加人数（工房の場合）」を明記の上、メールをお送りください。Zoom 参加者には後日、参加用のリンクをメールでお知らせします。

【問い合わせ先】メール：dousojin2021@gmail.com　電話：090-4236-4196（深澤）

「道祖神しんぶん」第 4 号　表面(右)と裏面(左)

丸石にやどるもの　中沢新一（特別調査員）

「ミシャグジ」について　芹沢昇

道祖神小説　石の満月（後）　黒田康之

道祖神しんぶん　第四号

「道祖神芸術調査グループ」始動　その2

2021年12月11日
発行：道祖神芸術調査グループ

お問アドレス：プロジェクト2021
深澤孝史
「道祖神トリビュレーション」

ご質問・ご要望は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

深澤孝史

●○わたしと道祖神○●

「書物を介した丸石道祖神との出会い」一條宣好（敷島書房 店主）

「道祖神諸説」金丸貴臣

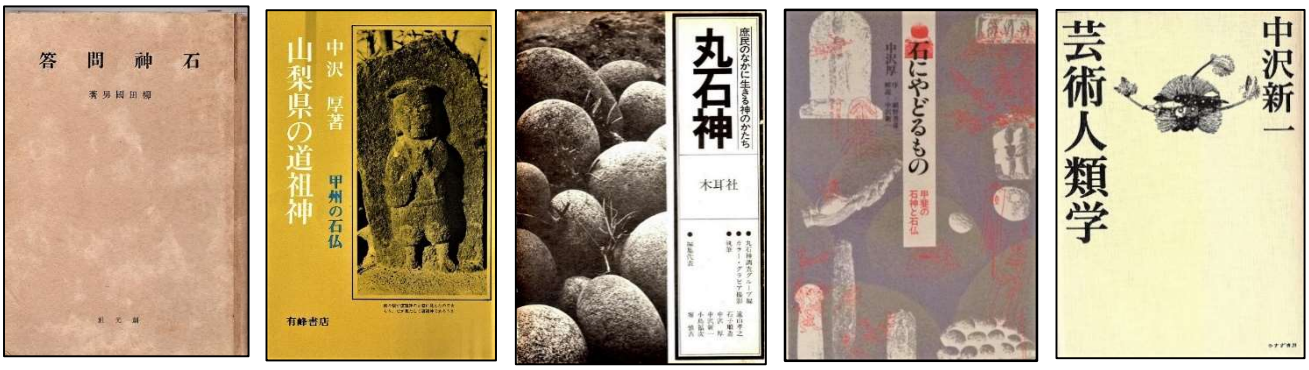
「石が気になる」雨宮千鶴（山梨県立美術館）

ヒラリとなのか、トントンなのか　鈴木つな

(3) 石(丸石など)関係の図書

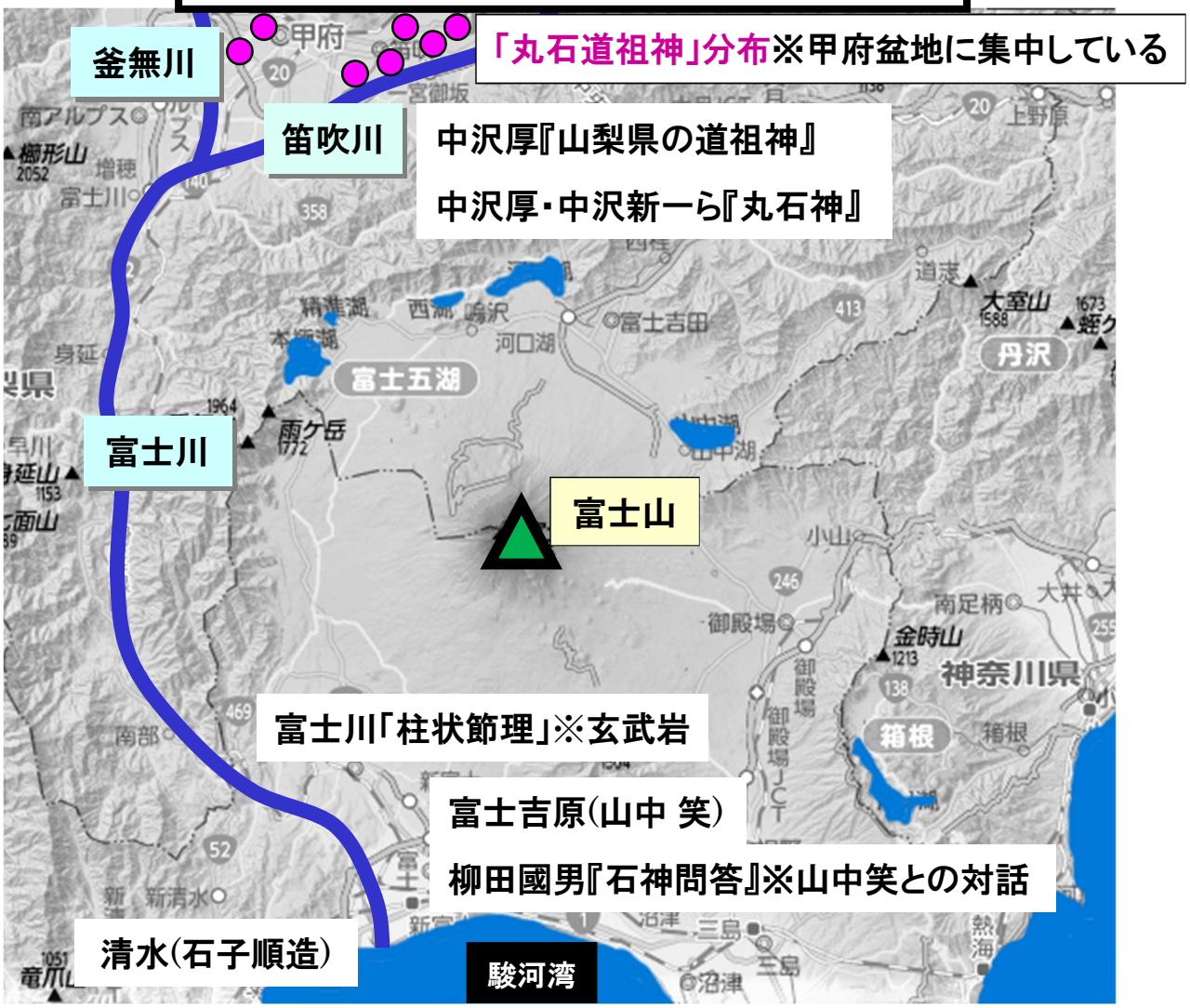
特に、国内を中心にした「石神」について触れた書籍の中では、柳田國男『石神問答』での山中笑との往復書簡での対話が有名である。

また、山梨県内の道祖神や丸石道祖神に触れた著書には、中沢厚『山梨県の道祖神』があり、その後、中沢新一らによって故石子順造に捧げる形で出版された『丸石神…庶民のなかに生きる神のかたち』などがある。



左から ①石神問答(柳田國男)改訂版 創元社 1941 年 ②山梨県の道祖神(中沢厚)有峰書店 1973 年
③丸石神(丸石神調査グループ)木耳社 1980 年 ④石にやどるもの…甲斐の石神と石仏(中沢厚)平凡社 1988 年
⑤芸術人類学(中沢新一)みすず書房 2006 年

富士川流域と丸石道祖神の関係



ⓒYahoo! 地図

8 「ワークショップ」と「パフォーマンス」の開催

会期中(11 月 16 日～12 月 12 日)には、「ワークショップ」2 回と「パフォーマンス」1 回が開催された。

今回の「ワークショップ」と「パフォーマンス」は、従来の美術作品の発表と見学という、一方向の流れから脱却して、美術館という場所で、作家と参加者が相互に交流する機会が与えられたことの意味は大きく、美術館の多用な表現の可能性が見えてきた。

20 世紀末には、ワークショップやパフォーマンスや自然環境なども、現代アートの中で広く扱われるようになった

■日本では、明治時代以降、西洋美術の導入により、美術とは絵画・彫刻などを指すことになった。 戦後につくられた近代美術館は、それらを中心に収蔵や展覧会が行われてきた。

■山梨県立美術館は、ミレー『種をまく人』で話題になった。
しかし、20 世紀後半になると、日本の「美術」という領域の概念では語られない多様な表現が、西洋から日本にもたらされてきた。

■20 世紀の「現代美術」は、マルセル・デュシャンの既製の男性便器の作品『泉』(1917 年)などの出現により、これまで美術領域の外にあったゴミなどを作品化したジャンク・アートや、ジェームズ・タレルによる自然の太陽の光を取り入れた作品なども現れるようになった。

■1950 年代には、アメリカ人ハルプリン夫妻(建築家と舞踊家)によって、建築(ランドスケープ)と演劇による参加型手法の一つとしてワークショップの手法が生まれ、美術の表現世界でも取り入れられるようになった。

■創作ダンスは、 21 世紀に入るとパフォーミング・アーツとして広く認知されるようになり、美術館などでも上演されるようになった。

ワークショップ
「どうそじんをつくろう」

パフォーマンス
「いしはおどるいしとまう」

アートワーク
「いしのまつりば」

(1)「ワークショップ」の開催

今回のワークショップは、「道祖神」をテーマにして、地域の子供から高齢者までが参加できる内容で考えた。

① 第 1 回ワークショップ『どうそじんをつくろう』 11 月 28 日 (13:30～)

ワークショップは、美術館の工房を使って、「北池」の「いしのまつりば」のスロープを作ったときに出た杉板を主な材料にしてミニチュア「祠(ほこら)」づくりを実施した。

道祖神のイメージを参加者に伝えるために、甲斐市宮地地区の石祠に丸石を祀る屋敷神の写真などを見せつつ、屋敷神の木祠を作って、あとでいい感じの石を参加者が見つけてもらい、「北池」に置くことにした。

ワークショップに参加した人たち

ワークショップで作品制作した
木祠を「北池」に置いてみた

② 第 2 回ワークショップ『いしはおどる いしとまう』 12 月 12 日 (13:00～13:30)

「クロージングイベント」の一環として、鈴木つなと一緒に踊り舞うワークショップを実施した。

参加者それぞれが、「北池」にある小石を二つ拾ってきて、それを叩いて音を出しながら、鈴木つなと一緒に踊り舞う行為である。そこには、小正月に県内で広く行われてきた伝承「道祖神祭り」の踊りの「リプロダクション」ともいえるものになった。

ワークショップで石を叩いて舞い踊る参加者
撮影：渡辺俊夫

ワークショップでの参加者の様子
撮影：渡辺俊夫

ワークショップでの鈴木つな　撮影：渡辺俊夫

(2)「パフォーマンス」の開催

① パフォーマンスが行われるきっかけ

今回、調査員に応募した参加者(9 人)の中に、創作ダンスを長くやっていた鈴木つなと大学のファッション課程で学んでいる近藤朋希がいたことがきっかけだった。

フィールドワークで訪れた金生遺跡(国史跡)には、「配石遺構」があり、その象徴が「石棒」や「丸石」で、金生遺跡の集落では祖霊を敬う祭礼が行われたとされている。

一方、甲府盆地に点在する「道祖神」では、古くから年の初めの小正月に「道祖神祭り」が各地で行われてきた。

美術館の「北池」を、「金生遺跡」や「道祖神場」に見立てて、「道祖神祭り」のような舞いの「パフォーマンス」を、鈴木つなや調査員と来館者も参加して行なうことにした。

② 『いしはおどる いしとまう』のパフォーマンス実施

パフォーマンスの所要時間は 20 分弱で、金生遺跡(約 3,000 年前)から現在までの時間軸を、鈴木つなの踊りと舞いで身体表現してもらった。

第 1 幕(現生)は、ワークショップに参加した人たちも入って石を鳴らしながら踊り舞う。

第 2 幕(現生から金生遺跡の時代の時間)は、鈴木つなが独演で踊り舞った。

■パフォーマー…鈴木つな(創作ダンス系舞踊家)

※今回、参加応募した調査員や来館者も飛び入りで参加

■音楽(演奏家)…白砂勝敏(楽器ディジュリドゥ、ムビラ)、ホンナミ キヨシ(フルート)

■衣装デザイン…近藤朋希(調査員参加者の一人)

■開催時間…約 20 分　※2021 年 12 月 12 日 (13:30～13:50)

鈴木つなによる創作ダンスの独演(北池にて)　　撮影:渡辺俊夫

ワークショップでの白砂勝敏による演奏の様子
撮影:渡辺俊夫

白砂勝敏(ディジュリドゥ)とホンナミキヨシ(フルート)による演奏　　撮影:渡辺俊夫

9 「道祖神芸術調査グループ ドキュメント」の映像上映と「中沢新一講演会」の開催

12 月 12 日(日)には、「クロージングイベント」の一貫として前半部では、「北池」と岡本太郎彫刻ヒロバを使った「ワークショップ」と「パフォーマンス」を開催した。

そして、後半部では、美術館の工房に会場を移動して、これまで撮りためたドキュメント映像の発表と、中沢新一(思想家・人類学者)によるオンラインレクチャーを開催した。

① 映像上映「道祖神芸術調査グループ ドキュメント」 12 月 12 日 (14:15～14:45)

深澤孝史が、11 月 16 日～12 月 12 日までの会期中に実施した「道祖神芸術調査グループ」のフィールドワークやレクチャー、ミーティングなどのプロセスをまとめたドキュメント映像を、編集してクロージングイベントの一環として発表を行った。

映像記録は、美術館にこられない人たちのことを考慮して、会場でのスクリーンによる発表とともに、美術館内の工房からは全国に Zoom での配信も行われた。

② オンラインレクチャー「丸石神の人類学」(中沢新一)開催 12 月 12 日 (15:00～16:30)

「道祖神芸術調査グループ ドキュメント」映像上映後には、中沢新一による講演会が、美術館内の工房での聴講とともに、オンライによるレクチャーでも Zoom で行われた。

中沢にとっては、幼少のころから慣れ親しんできた思い入れのある「丸石道祖神」をテーマにした講演だったこともあり、心温まる内容だった。講演の内容を以下に要約しておく。

○「丸石神」と自分は、幼少のころから一体化した環境にあり、父親(中沢厚)が民俗学をやっていたこともあり、「丸石神」という存在があることは知っていた。

○丸石神の存在自体は、自分にとって「ファミリーヒストリー」みたいなものである。

○山中共古(甲府教会と日下部教会兼任の牧師。別名・山中笑)は、甲府を中心にして民俗学のフィールドワークを始めた人で、著書『甲斐の落葉』で「丸石道祖神」を紹介した人物。柳田國男の著書『石神問答』では、往復書簡の相手が山中笑だった。

○網野善彦(父親の妹の夫)は、《信貴山縁起絵巻》に道祖神が描かれているといった。

○「金生遺跡」(北杜市)の発見は、石棒と丸石が祀られた配石遺構の存在からも、丸石信仰自体が縄文時代の信仰形態まで遡っていく可能性がでてきた。

○柳田國男の言葉を使えば「古層」の日本人の信仰の形態が、現在、山梨に多く存在する「道祖神場」に残っている可能性がある。

○石子順造(美術評論家)が、静岡の画家や彫刻家を連れて父親のところにやって来て「先生(中沢厚)の『山梨県の道祖神』という本を読んで大変感銘を受けた。この本は、現代美術を転倒させる革命的な書ですよ」といわれて親父は驚いていた。

○『山梨県の道祖神』を読んだ熊本県の人から、父親あてに手紙が届き、熊本県や和歌山県にも丸石を祀ったところがあることを知って、自分は調査に出かけた。

○熊本、和歌山、静岡というラインと、静岡から富士川を遡って笛吹川にいたる「丸石」の分布は、「海民」のルートではないかと自分は思っている。

深澤孝史による映像発表会(美術館工房にて)
撮影:本阿弥清

中沢新一の講演会　撮影:本阿弥清

10 「北池」再生計画の提案

山梨県立美術館は、「芸術の森公園」の一角にあり、公園内にある「北池」も美術館と同時期に整備がされているため、1978 年が完成した年とすれば築 43 年となり、建物と同様に公園内の人工物の「老朽化」も進んでいるといえる。

特に、21 世紀に入ってからは、地球温暖化の大きな要因にもなっている二酸化炭素の排出問題を考えると、人工的な整備は最小限に抑えた、コンクリートや鉄筋などの人工素材を極力使わない工法の導入が望ましいといえる。

ただし、美術館(本館)と接する「北池」の北側部分に関しては、モダニズム建築と一体となっており、大きな改変は必要ないといえる。

■地球環境に負荷をかけない「北池」づくり…
コンクリートや鉄筋などの人工素材を極力使わない工法の導入

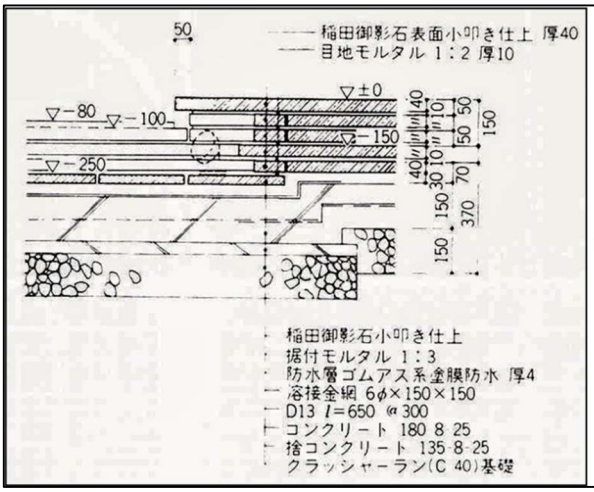
■山梨県の歴史・文化や風土を生かしたプランづくり…
金生遺跡や丸石道祖神などの縄文(後期)から続く伝統・文化を投影した庭の計画

■基本的には、美術館建築(前川國男設計)や北池(流政之の庭園)を生かしつつ、自然の環境とも出合える場づくり…
20 世紀モダニズム建築の系譜を尊重しながらも、日本らしい温かみのある池として少しだけ手を加える

(1) 人工素材を極力使わない工法の導入

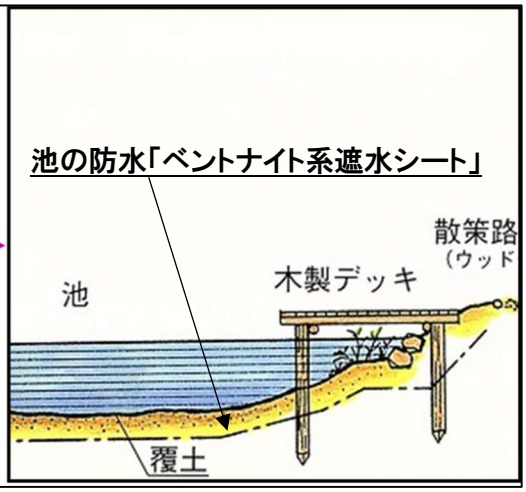
「北池」の池部分は、「鉄筋コンクリート構造」から「天然鉱物防水工法」に転換することを提案する。池の基盤と防水処理の方法としては、これまで一般的に使われてきたコンクリートや鉄筋などの人工材を使用しない工法の導入である。

※噴水池は、アスファルト系塗膜防水から、粘土鉱物のベントナイト系遮水(しゃすい)シートへの転換を検討



「つくばセンター広場」(磯崎新設計)の池の断面(事例)

転換



「粘土鉱物」を使った池断面の模式図例

(2) 金生遺跡など伝統・文化を投影させた北池

「金生遺跡」の配石遺構の形を、「北池」の配置に移行させる「見立て」の造園手法を導入する。

【丸石道祖神の起源(ルーツ)をたどる】

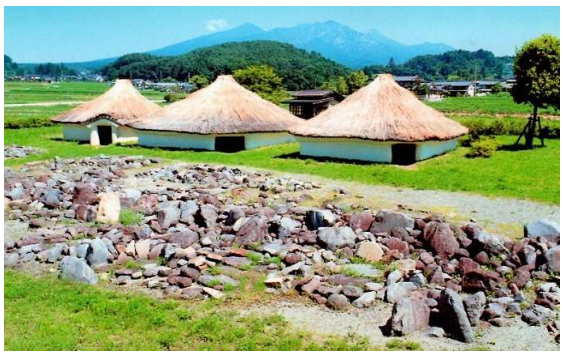
金生遺跡の石棒・丸石と祭礼の儀式

3,000 年近く前(縄文後期)のムラ跡として、住居跡や配石遺構が発見された。その中には、石棒とともに丸石もあり、当時、球形に神秘性を見たのか祭礼に使われたと思われる。（「冬至」の日没には、甲斐駒ヶ岳の山頂に日が沈む。死者の再生や豊饒を祈る祭礼が行われた可能性がある）

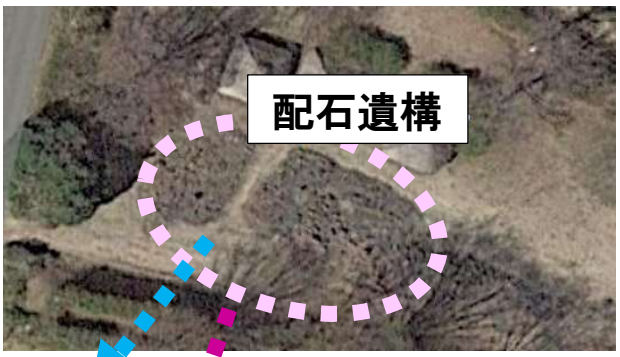
丸石は神として祀られてきたのか？

丸石は、12 世紀頃に道祖神として祀られていた可能性があることが、絵巻『信貴山縁起絵巻』(平安時代)などでわかっているが、金生遺跡などの縄文時代の遺跡から発見された丸石とつながるかは、はっきりとはわかっていない。
甲府盆地には、多くの丸石道祖神が祀られているほか、集落に点在する住居の敷地内に丸石がさりげなく置かれてある風景にも気づかされる。

【金生遺跡を「北池」に見立てるプラン】



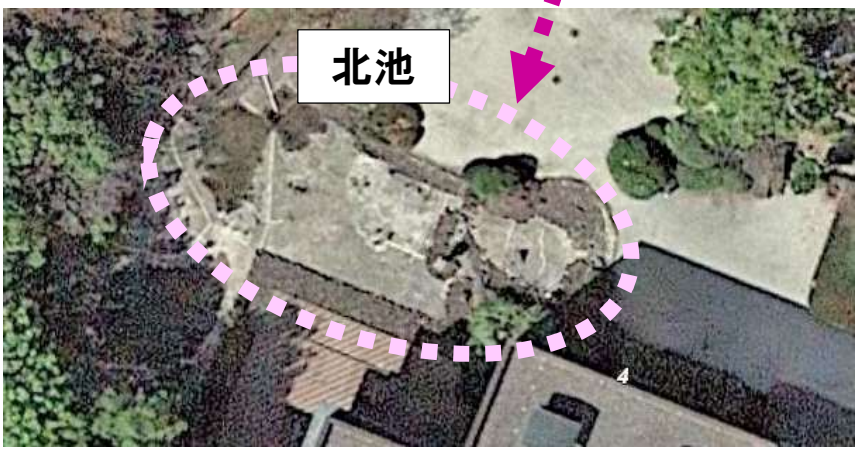
金生遺跡(北杜市) ※北杜市パンフレットより



金生遺跡の航空写真 ©Google マップ

甲斐駒ヶ岳の方向

見立ての技法



山梨県立美術館の本館と北池航空写真 ©Google マップ

(3) モダニズム建築を生かした修景デザイン

山梨県立美術館は、前川國男建築設計事務所の設計で 1978 年にオープンした、20 世紀に起こった西洋的な近代建築の流れをくむモダニズム建築である。

また、建物本体と一体となった池の庭園デザインは、彫刻家として国際的にも活躍していた流政之が、「北池」として設計から造形まで手掛けている。

当時の国内では、建築家と造形家(彫刻家)の共同作業はまだ珍しく、建築とランドスケープが融合することになる初期の黎明期につくられた、美術館と一体となった池の庭である。

【山梨県立美術館建築の誕生と現在を知る】

美術館建築(前川國男)とは？

前川國男(1905～1986)は、日本のモダニズム建築をリードした建築家の一人であり、美術館建築の作品では、東京都美術館(1975 年) 、山梨県立美術館(1978 年)、宮城県美術館(1981 年)などがある。

また、ル・コルビュジェの建築群としてユネスコの世界文化遺産に登録された国立西洋美術館(東京)の設計に関わった人物の一人でもあった。

美術館庭「北池」(流政之)とは？

流政之(1923～2018)は、石を使った彫刻家として国際的に活躍し、ニューヨーク世界貿易センターの巨大な彫刻『雲の砦』(約 250 トン)などで知られている。(作品は 2001.9.11 アメリカ同時多発テロでセンターが破壊されたために撤去)

また、庭を彫刻として見立てた作庭作品も多くあり、その一つが山梨県立美術館の「北池」であり、前川國男建築設計事務所との共同作業といえる。

「北池」は、「3.11」東日本大震災で節電のためポンプを停止して、長期間、池に水を溜めない状態が続いた。その後、池にも破損が生じていることが判明し、現在も涸れた状態のままとなっている。

美術館(本館)のデザインは、20 世紀モダニズム建築の流れをくみ、直線的な外観となっている。

また、「北池」のランドスケープ(庭園設計)は、アメリカで活躍していた日本人彫刻家の流政之が手掛けたもので、直線を多用したモダニズムを意識したデザインで設計されている。

今回、山梨県立美術館員が、古い雑誌などを調査するなかで、流政之のデザインコンセプトと、池の中央部に配した石彫刻のタイトルなどを突き止めた。

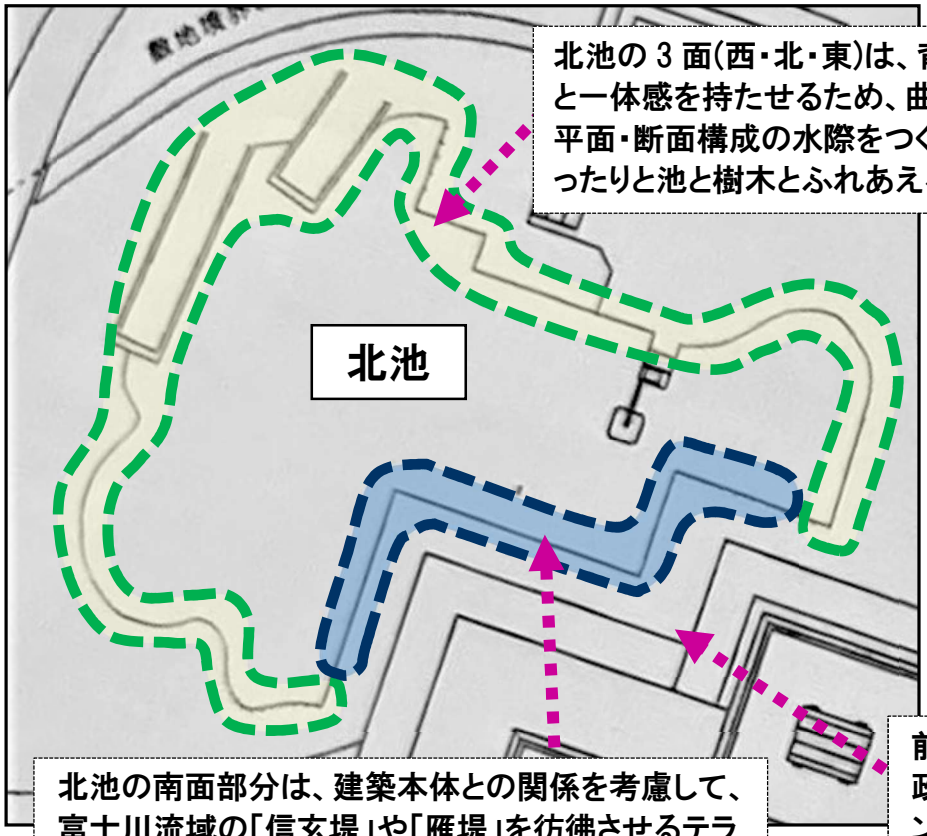
『藝術新潮』(1978 年 12 月号)には、山梨県立美術館オープン記事が掲載されており、池の中央部に置かれた石彫刻のタイトルが《かくし灯籠》で、デザインには「道祖神」の祠のイメージが取り入れた可能性が高いことが分かってきた。

また、「北池」のデザインでは、山梨の風土を意識して、富士川流域の治水工法として知られている「信玄堤」などの形が、建築とつながるテラス部分で使われていることが分かる。

現在、「北池」部分の南面にあたる本館側の階段状のテラスは、モダニズム建築の直線的デザインが生きているが、他の部分(東面、西面、北面)は、美術館を取り囲むように樹木の森(芸術の森)として、緑豊かな自然を感じさせる空間となっている。

このため、美術館(本館)側にあたる「北池」の南面を除く 3 面は、曲線を多用した水際修景デザインを提案する。

北池の修景をデザインする



北池の 3 面(西・北・東)は、背後にある樹木と一体感を持たせるため、曲線でゆるやかな平面・断面構成の水際をつくり、来訪者がゆったりと池と樹木とふれあえる空間をつくる

オープン当時の「北池」
※写真は山梨県立美術館提供

前川國男(建築)と流政之(庭園)のデザインのつながりを保つ

北池の南面部分は、建築本体との関係を考慮して、富士川流域の「信玄堤」や「雁堤」を彷彿させるテラス形状を残して、モダニズム建築との一体感を保つ

美術館の「北池」の形状は、「金生遺跡」の配石遺構に見立てて、中央に位置する石の彫刻は「石棒」を、池の外周の礫石(レキ石)は「丸石やその他の石」に例える。

北池を金生遺跡に見立てる

「北池」を金生遺跡に見立てて、流政之の石彫刻《かくし灯籠》は石棒に、甲府盆地で見つけた丸石は、レキ石の中に池の配石として置く

建物本館側は、流政之庭園(既存のレキ石)はそのまま残す

金生遺跡の配石遺構のレプリカ
(北杜市考古資料館)

山梨県立美術館の本館と「北池」

流政之の石彫刻《かくし灯籠》を「棒石」に見立てる

既存レキ石を残しながら、丸石(甲府盆地の丸石)を、部分的に挿入する

11 おわりに（深澤孝史、本阿弥清）

■深澤孝史

中沢新一さんは、最終日の「丸石神の人類学」レクチャーで、「道祖神場は文化のゴミ捨て場」という発言をされた。

時の政権やメインストリームに見放されたり、時代の必然性から不要とされた文化や信仰が「道祖神場」にはどんどん捨てられて今でも残っているという意味だ。

どうしてそのような道祖神場が今も機能しているのかはよくわからないが、それを聞いてそれではまるで現在の芸術と同じような存在だなと思った。アートは、必然性や機能を削ぎ落としてなお残るものの本質を捉えてみる、そういうところがある。ゴミだったり、虐げられているものだったり、無価値だと思われているものにこそアートは力を発揮する。今回のプロジェクトは、そうした道祖神場のゴミ捨て場としての役割を我々自身が実演しはじめてみたものと言えるのではないだろうか。山梨にはたくさんの文化のゴミ捨て場があり、私たち一人一人が文化のゴミを演じていくことで、ゴミだと思っていたさまざまな文化の意味が変容していく。今回の涸れた機能しなくなった北池もその一つと言えるかもしれない。

持論だが、それは石神未満の感性が十全に機能してきたからではないだろうか。扇状地でとにかく大量の石に囲まれ、土を掘っても石だらけの一見不毛な土地である山梨だが、大量の石に機能や意味を見出してきた精神が根底にあるから我々はゴミをゴミと見ずに神を見出してきたのかもしれない。

３ヶ月あまりの短い期間の出来事ではあったが、本プロジェクトが、山梨における風土と丸石神、道祖神のつらなりの今を表すことで、現在の道祖神と私たちとの関わりと過去の営みとを結びつけるきっかけの一つになることを願う。

最後に「おわりに」にかえて少し長いが、展示会場に掲げた拙文を添える。

【丸石神、石神未満、道祖神】

山梨県には、地域特有の丸石道祖神があるが、住民は「いい感じ」の石を見つけると道祖神や屋敷神、その他さまざまな神様と一緒についつい祀ってしまう習性がある。「いい感じ」の石を見つけて神様にする才能がある。「いい感じ」の石が見つかるのは、「いい感じ」ではないその他大勢の溢れんばかりの石と日常的に生活しているからなのではないか。河原には流れ流れて角が削り落とされた石がいくつも転がっており、地面を掘ればごろごろ石が出てきて、畑を覗くと出番待ちの石たちがそこかしこに列を作っている。山梨県民が、「いい感じ」の石を見つけて神様にしてしまう背景には、実は「いい感じ」の石でなくても、何万年もの間、日用の道具として使い続けている蓄積があるのではないか。ちょっと散歩して路地や畑、庭先を眺めると、「いい感じ」に活用されている石たちを多く発見することができる。石が「いい感じ」でなくても、ついつい「いい感じ」に活用してしまう様のことを、今回「石神未満」と名付けてみようと思う。それはたくさんの山と川に囲まれた扇状地の地形の中で何万年もかけて、特有の感性として育まれてきたものではないだろうか。

「いい感じ」ではない石が「いい感じ」に活用される様のことを「石神未満」と名付けてみたが、「いい感じ」であるはずの丸石神も本来は「石神未満」の特徴をそもそも宿しているのではないかとも思えてくる。山梨県にほぼ固有の丸石道祖神だが、なぜ丸石を道祖神として祀っているのかはいまだにわかっていない。しかし、北杜市大泉町の金生遺跡をはじめ、山梨の縄文遺跡からはいくつもの石棒や丸石が出土しており、道祖神ではないが、まるい石を祀るという精神性は少なくともその頃にはあったことがわかる。縄文遺跡があった場所に弥生の住居跡が見つかる例は少なく、住まわれなくなった縄文住居が土に埋もれていき、時を経てその遺跡の上に誰かが住み始める。そしてたまたま地面から丸石を掘り当ててびっくりして、新たな神として、時を超えて祀られたりもしたのではないだろうか。人間の営みに関係なく石は石の時間軸で生きていて、時々人間が石を見つけては勝手に祀った

り祀らなかったりするという関係を続けていて、ある時になって丸石は道祖神として祀られるようになり、小正月や道祖神祭の芸能などさまざまな文化や信仰が集合・習合したり、途絶えたりしながら現在に道祖神信仰が続いているのではないだろうか。丸石は道祖神だけではなく、屋敷神や色々な神を祀っている石碑や祠の前にもたくさん祀られている。道祖神だけではなく、この地ではさまざまな神が丸石で表されていく。

近代に入ってから、近代以前のようなハレとケを重視する生活感覚が失われたことによって、丸石神も信仰心が希薄化しているという意味で石神未満化しているといえるかもしれない。もちろん今も祭をやっている地域は多く、道祖神の多くは地元の方々に大事にされている。しかし生活が変わり道祖神場は現在、ゴミステーションとして活用されたり、自販機群が並んだりもする。敷地の側にコンビニが立ち、道の拡張に伴い移設されたりもする。役目を終えて消えていくものもある。道祖神を媒介として集落の拠り所にしたり、自然と呪術的な対話をするような感覚は徐々に失われつつある。しかし、石神未満化した道祖神を介して新たな関係を紡ぐ感性も生まれてきているのではないかとも同時に感じている。それは生活や景色が人間の都合で変わっていっても、石の変わらなさが私たちに気づきを与えてくれている。人間の都合で勝手に祀られている石たちが、気に留められなくなっていくことで、逆に「今」を重視しすぎる人間の時間軸を超えた存在としてもう一度浮かび上がりはじめる。本質的に石は人間とは無関係であるという意味で「神未満」であることが、私たちが石を神とみてしまう条件となっていることに気づく。そしてそうした新たな感性がこの地に培われるのも、もともと対話の難しい石や丸石神や道祖神との「いい感じ」な戯れを続けてきたからだと思っている。

■本阿弥 清

深澤孝史さんが、私に電話を掛けてきたのは 9 月 7 日のことで、山梨県立美術館の 2021 年度事業として募集があった「山梨アートプロジェクト」に、「丸石道祖神」をテーマにした深澤さんの企画「道祖神リプレゼンテーション」が採用されたことがきっかけだった。

私は、Facebook（プロフィール写真）に、「丸石」(14 年前に笛吹市で撮影)を自分の顔に見立てて似顔絵を描き足して使っているくらい〈玉石〉に愛着があり、これまで国内外の自然の石を追いかけてきた理由に、丸石に「空間と時間」の造形表現の究極を見たからだ。

また、私は、人類学者の中沢新一さんや美術批評家の椹木野衣さんとともに、多摩美術大学芸術人類学研究所が主催した、「石子順造と丸石神」展(2010 年)を、三人で企画・実行したこともあった。

深澤さんは、このような私の過去の情報をインターネットなどで知り、共通の知人（佐野翔）を介して協力要請の声を私に掛けてくれたのだろうと思う。

今回の文化庁支援事業は、交付の決定時期や窓口となる美術館側の審査等の都合と、単年度事業ということもあって、1 ヶ月足らずの期間で野外に立体作品を制作展示するという、新作をつくるには過酷ともいえる厳しい条件下でのスタートだったと聞いている。

しかしながら、深澤さんにとっては、生まれ育った出身地の山梨で、幼少の頃から慣れ親しんできた「丸石道祖神」をテーマにアートプロジェクトがやれることは、感慨もひとしおだったに違いない。

深澤さんの故郷に対する熱い思いが、調査員らとのリサーチをとおして沸きあがってきたいくつものプロジェクト（提案）を、身近な関係者にも声をかけながら、質を落とすことなく完成させようと、怒涛の日々の中で作業を遂行したことには私も驚かされた。

今回、私が、頼まれたわけではなく記録集の監修・発行作業を買って出たのは、深澤さんの純粋なアートに対する貪欲な姿勢と困難な状況を目の当たりにして、私の「現代美術」の批評精神の血が騒いだことや、中沢新一さんらが、40 年前に故石子順造に捧げる形で出版した『丸石神…庶民のなかに生きる神のかたち』に対するアクションの一つとして、深澤さんが参加者らとともにやり遂げた、21 世紀における美術館という場を使った新しい美術表現のありようを、記録として残してあげたいという思いが強くなったからだった。

■参考資料

1　山梨県立美術館と「山梨アートプロジェクト 2021」

山梨県立美術館は、1978 年に開館した。19 世紀の画家ジャン・フランソワ=ミレーの《種をまく人》がコレクションされていることでも知られ、「ミレーの美術館」としても親しまれている。

「山梨アートプロジェクト 2021」は、山梨の歴史、文化、自然などをテーマに現代アーティストによる作品プランを募集し、審査員によって選考されたプランに基づき、アーティストが制作・公開をおこなうものだ。

芸術の森公園や県内市街地を活用しながら、新進アーティストによる「山梨」の新たな解釈を促し、アートをとおして美術館と地域の新たな繋がりを創出するものである。（山梨県立美術館ホームページより引用）

山梨県立美術館とヘンリーム一アの彫刻作品　撮影：本阿弥清

山梨県立美術館の立て看板

「山梨アートプロジェクト 2021」の案内チラシ（表面）

「山梨アートプロジェクト 2021」の案内チラシ（裏面）

2　「石子順造と丸石神」展(多摩美術大学芸術人類学研究所・2010 年)

「石子順造と丸石神」展は、2010 年に中沢新一、椹木野衣、本阿弥清の三人によって東京で企画・開催されたもので、山梨の「丸石道祖神」を撮影した遠山孝之の写真と、石子順造ら「丸石神調査グループ」の一員として、丸石神探索に加わった美術家の小池一誠の丸石系の彫刻作品を展示したものだった。

ちなみに、小池一誠は、1970 年代に『石の民俗』を著した野本寛一(民俗学者)と同じ高校(静岡県立藤枝東高校)の教員として、二人は交流があったといわれている。

■会期…2010 年 10 月 16 日～30 日
■会場…CCAA アートプラザ(ランプ坂ギャラリー)
■主催…多摩美術大学芸術人類学研究所、NPO 法人市民の芸術活動推進委員会
■企画…中沢新一(所長)、椹木野衣(所員)、本阿弥清(特別研究員)…多摩美術大学芸術人類学研究所
■出品作家…遠山孝之(写真)、小池一誠(丸石彫刻)

■石子順造(いしこ　じゅんぞう)　※本名…木村泰典(きむら　やすすけ)

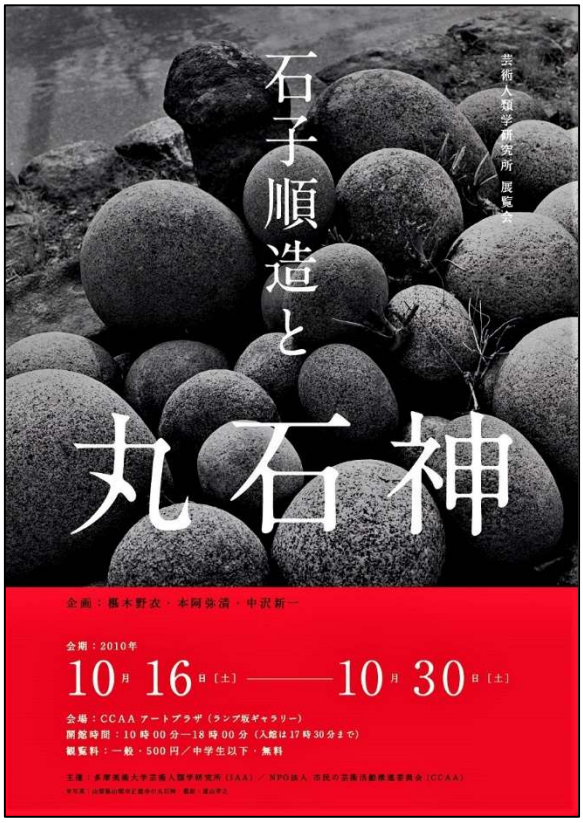
1928 年、東京生まれ。美術評論家。活動領域は美術・マンガ・演劇・芸能・民俗信仰など多岐にわたる。東京大学経済学部卒業後、1956～64 年鈴与株式会社(静岡県清水市)に勤務。1965 年に単身上京して評論活動を行い 1977 年に没。

■小池一誠(こいけ　かずしげ)

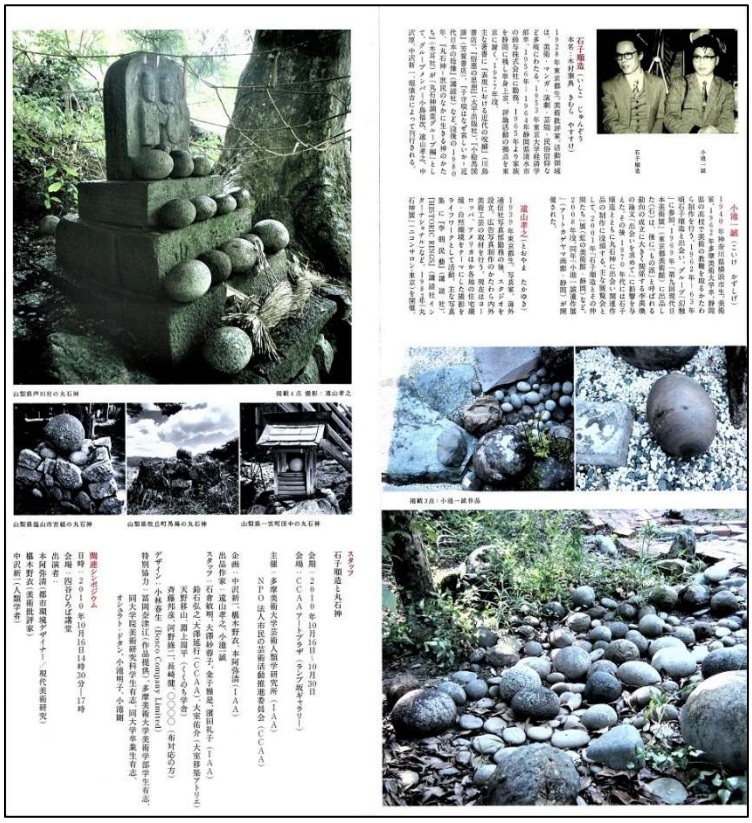
1940 年、横浜市生まれ。1962 年多摩美術大学卒業後、静岡県内の公立高校で美術の教鞭をとるかたわら作品制作を行う。1962～63 年頃に清水で石子順造と出会い、グループ「幻触」に参加。2008 年に没。

■遠山孝之(とおやま　たかゆき)

1939 年、東京生まれ。写真家。海外通信社写真部勤務の後、スタジオを設立。広告写真制作のかたわら内外美術工芸の取材を行う。現在、ヨーロッパ、アメリカほか各地の住宅環境をテーマにした撮影をライフワークとして活動。



「石子順造と丸石神」展のチラシ　小林春生(Bosco)



「石子順造と丸石神」展パンフレットの一部

「丸石道祖神」（山梨市七日市場中組）のドンドンヤキ　　撮影：深澤孝史

※この地区では、小正月（1 月 14 日夕刻）に「オコヤ」や正月飾りを燃やす「ドンドンヤキ」が行われる。
　山梨県内では、「オコヤ」を「オカリヤ」と言ったり、「ドンドンヤキ」を「どんど焼き」など、各地区で呼び名も伝承により異なっている。

道祖神芸術調査グループ（深澤孝史）<dousojin2021@gmail.com>
NPO 法人環境芸術ネットワーク（本阿弥清）<yva43636@biglobe.ne.ne.jp>

© 山梨アートプロジェクト 2021「道祖神リプレゼンテーション」

「丸石道祖神」 撮影：野沢なつみ